魔界水滸伝11

栗本薫

KADOKAWA NOVELS

轟音。雷鳴。祈り。叫喚——。人類の世紀!
ついに幕を閉じた! 現代の語部が贈る紡
たる伝奇SF、圧巻の第1期完結編。

カドカワノベルズ

昭和六十一年五月二十五日初版発行
昭和六十三年六月二十五日七版発行

著者　栗本薫（くりもとかおる）
発行者　角川春樹

魔界水滸伝（まかいすいこでん）11

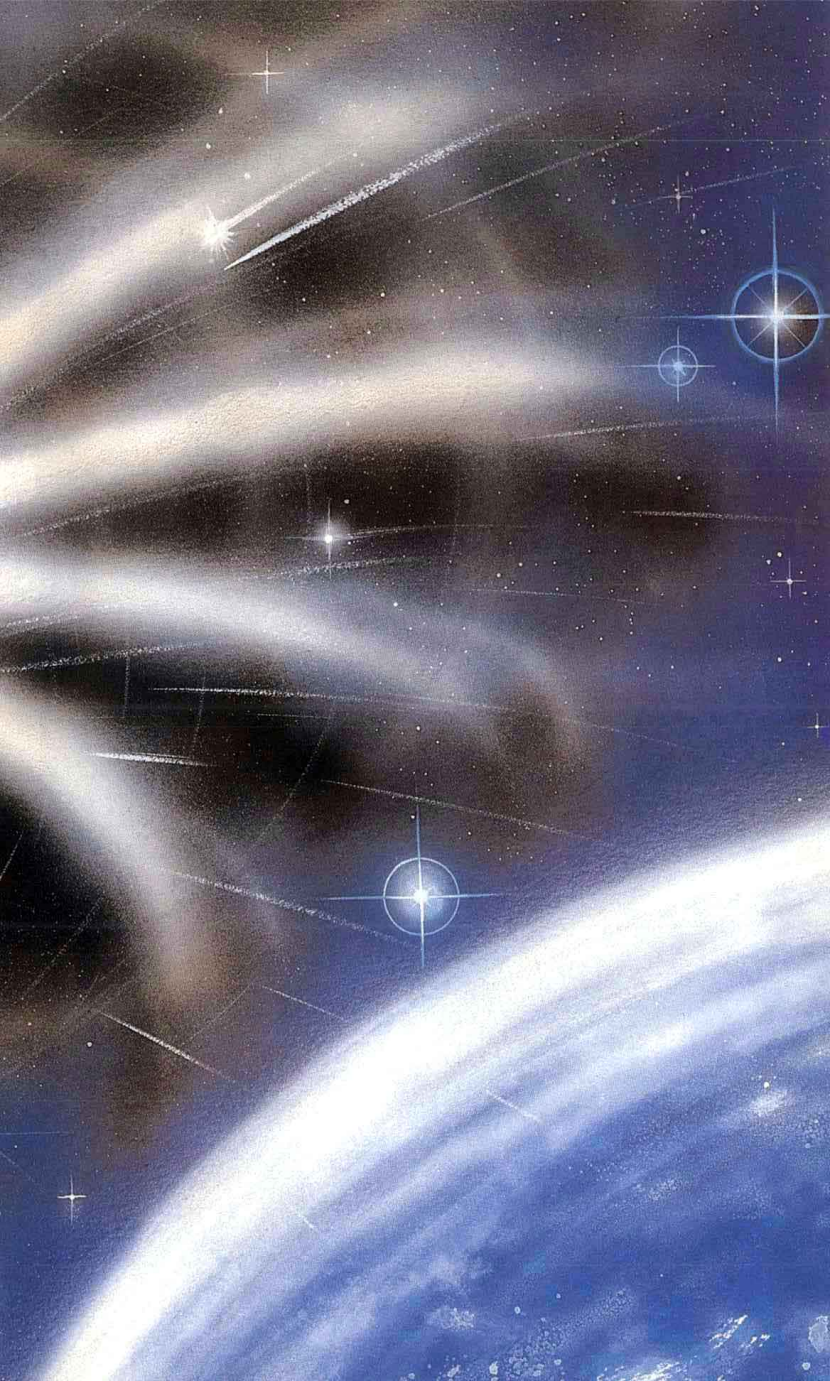
印刷所　大日本印刷株式会社
製本所　株式会社宮田製本所
装丁者　岡村元夫

発行所　株式会社角川書店
東京都千代田区富士見二―一三　振替東京三―一九五二〇八
〒一〇二　電話営業〇三―二三八―八五二一　編集〇三―二三八―八四五一

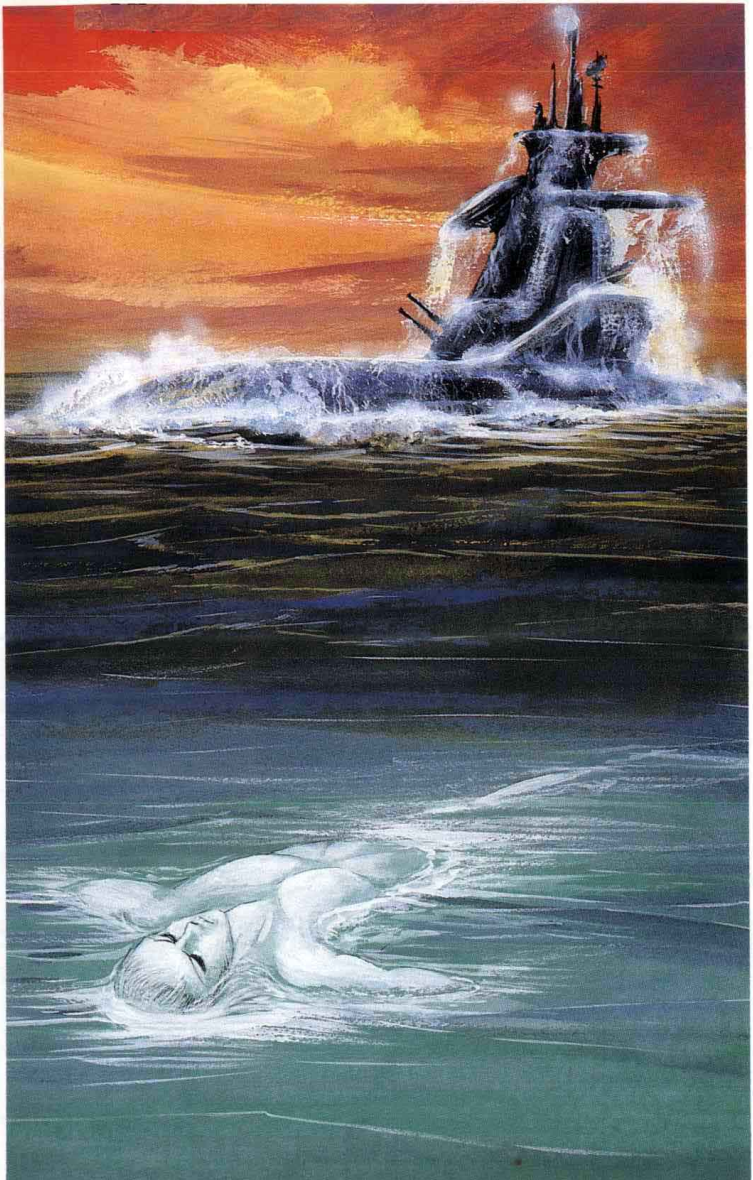
Printed in Japan 落丁・乱丁本はお取替えいたします
ISBN 4-04-770911-5　C0293

あまりにも巨大な崩壊のまえで、人間の悲鳴も叫喚もすべては消えた。まだ空を見上げるほどのゆとりのあったすべての人々は、走る稲光の群れ、空をひきさく光の妖蛇(ようじゃ)のすがたをみた。

（本文 第四十五章「神曲 2」より）



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb



洋上に漂流している物体は、《アーク》が浮上しても、攻撃してくるようすはない。「あんな、レーダーであんなふうにうつる物体が、ただの人間だ、なんてことは…」「そいつは、北斗多一郎だ」

（本文 第四十六章「神曲10」より）

クトゥルーの存在していたとおりのかたちに、ぽかり、と深淵に、虚無へと通ずる《穴》が生じた。「わが

KADOKAWA NOVELS

魔界水滸伝 11

栗本 薫

ハー絵・口絵・本文イラスト／永井豪

魔界水滸伝11　目次

第四十五章　神曲 2　11
神曲 3　22
神曲 4　27
神曲 5　36
神曲 6　49
神曲 7　54
第四十六章　神曲 8　63

神曲 9 74
神曲 10 89
第四十七章 竜虎 1 115
竜虎 2 125
船出 1 132
船出 2 141
船出 3 149

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

船出 4 161

第四十八章

終曲（アンダチュア） 1 167

終曲 2 178

終曲 3 193

終曲 4 202

第四十五章

神曲　2

運命の、その日。

はるか地球の上空、成層圏をもつきぬけた絶対零度の宇宙空間に、歴史はじまって以来かもしれぬ、何か途方もなく巨大な二つのものがあらわれた。

金色に輝く、八つの尾をもつ光の渦巻、とでもいったらよい、巨大な発光体。

そして、もうひとつは――

名状しがたいある異質なもの。

それらははじめ、まるで人間たちの小ざかしい手で神聖な宇宙空間へ打ちあげられた、新しいスペース・シャトルでもあるかのように、大洋のまん中にうかぶ大陸から、まっしぐらに上空へむかっておどりあがっていったのだ。

地球の重力圏を脱出するのは、この両者には、格別の努力も要さぬことであった。

そして、暗黒の空間にまいあがるや、それらは、すべての地上的な束縛をも、制限をもこえて、その、本来のスケールと、人間には正視するさえあたわぬ、そのおそるべき本来のすがたをとりもどし、たちまちその天文学的なレベルのパワーをふりしぼった、この世のものでない死闘をくりひろげはじめた。

どちらも、語の真の意味でまったく有機的、地上的、三次元的生命でありはしなかったから、そのたたかいというのもまた、およそ人間どもの考えうるこの世の「戦い」とは、様相を異にしたものでしかなかった。たぶんどこがどうたたかっているのかさえ、まったく、人間的な視力からは、認めることすら不可能であったろう。

しかしそれは宇宙史にのこる一騎討であった。地球、というこの緑の惑星そのものが生み出した高エネルギー生命体、みづち一族の若長、八岐と、異次元よりの侵略者の巨魁クトゥルーとの、それは、この侵略戦争はじまって以来最初の、正面切ったぶつかりあいにほかならなかった。

その凄絶なたたかいは、地上からは、ただはるか上空に稲光が走ったり、時ならぬ流星や、小さな閃光が上るようにしか見えなかったけれども、しかし、成層圏の上でのこのすさまじいパワーどうしの激突が、地上に何らの影響を及ぼさぬわけはない。

この日。

世界は、荒々しい天変地異の嵐におそわれた。

大地震と竜巻によって、摩天楼都市ニューヨークは瞬時にして壊滅した。

すべてが、書割の、紙と木に描かれた一場の夢にしかすぎなかったとでもいうかのように、エムパイア・ステート・ビルディングも、国際貿易センターも、五番街を埋めつくした林立するすべての高層ビルが折れくずれ、はるかな地上へとくずれおちていった。

もともと、固い岩盤の上にあり、地震のおそれを知らぬからこそ、こんなに天を摩してそびえるに到った高層ビル群は、この超自然のまきおこしたマグニチュード8の前に、なすすべを知らなかった。

人間が——インスマウスたちが、容器からふりまかれるアリどものようにバラバラと地上へ降っていき、大地は血と叩きつけられた人体とで、うれたトマトの工場のようになった。

その上に、ゴゴゴゴ……と轟音もろとも、二つに折れたビルがくずれおちる。

ハドソン川の水位は激増し、あふれた。津波が全市をおそった。

もはや、それは、最後の審判の日、それ自体であった。

あまりにも巨大な崩壊のまえで、人間の悲鳴も叫

喚もすべては消えた。建物がつぎつぎとくずれおち、竜巻が海の水を吸いあげ、川は逆流した。
WWSA（全世界人類防衛機構）のニューヨーク本部ビルも、むろんまぬかれることはなかった。地獄のサウス・ブロンクスも、しょうしゃな西五番街も、すべてが無差別に、公平に、ひとしなみに破滅のときを迎えるにいたったのだった。
もはや、ささやかな人間どもの悲劇も絶叫も、何の価値ももつことはなかった。濁流からつき出る助けをもとめる手も、轟音にかきけされる叫び声も、この大いなる転変のなかで、より巨大な存在の注意をひくことはまったくなかった。
ニューヨーク——
二十世紀文明の、ひとつの象徴でもあったこの、美しく、倦怠と活気にみちた絶望のソドム。
それはいま、わずか一日にして、完膚なきまでに崩壊しようとしている。
ひとりニューヨークのみではなかった。
成層圏上での、巨大すぎるエネルギー体同士の激突は、地球大気圏に異変の波動を及ぼし、地球全域に、その波動はひろがってゆきつつあった。
海面は泡立ち、高波がそこかしこでおこった。
白昼、唐突に、空は暗黒につつまれ、そこに人々——このとき、まだ空を見上げるほどのゆとりのあったすべての人々は、すさまじい、何ものかの爆発かとうたがわせる、走る稲光の群れ、空をひきさく光の妖蛇のすがたをみた。白虹が走り、狂おしい光の網を織りあげた。
次の刹那、豪雨がはじまった。すさまじい雷雨が波立つ海面を叩きつけ、ゆらぐ地上を洗いながした。ワシントンで、ロサンゼルスで、ニュー・メキシコのタオスで、グラナダで、死海のほとりで、京都で、ウラジオストクで、昭和基地で、香港で、ウルムチで、アンデス山中で、ジンバブエで、エルサレムで、アンカレジで——

すべての場所で、さまざまに異るすがたではあったが、人々は、これまでにすでに凶変の渦中にあったものも、何ひとつ知ることなしにすごしてきた幸運なものも、何ごとかがついに来たったことを知った。

人間族が、つねに、心の中にかくしもっていた「その時」への恐怖——

それはいま、現実のものとして、立ちあらわれたのだ。

すべての人種、すべての民族、すべての宗教が、ずっと内奥にひそめもっている、ほろびと最後の日への伝説と予言。

海辺の町は津波におおわれ、火山近い町は火山の噴火の地鳴りをきいた。

さらに多くの大都市が、クーデターと恐慌、パニックの津波の渦中にあった。

わが東京——すでに半ば以上、魔都と化し、そしてクーデターと暴動によって、ほとんどかつての秩序の片鱗をすら、とどめえなくなっていた、東京も、また。

死者の屍に鞭打つかに似て——

豪雨が廃墟を叩き、虐殺してつみあげた屍を叩く。

恨みをのんだ死者の首、その大きくあけた口、黒くやけこげた棒くいの上に、車軸を流す豪雨があとからあとから叩きつけた。

ごおおお……

世界中がいまはの際の苦悶に叫んでいるかに似て。

いまや、地鳴りはたえまなかった。

その中を幾多のあやしい発光体のみが、とびかい、空をかけぬける。

これが——

おお、これが、われわれのそれと知っていた世界と、まことに同一のものであっただろうか？

地鳴りと雷鳴、はるかな地獄の、グラックの馬たちのひづめのとどろきに似て——

鳴動する暗黒の世界に、青い火、赤い光、白虹が

世にもふしぎな悪夢をおりなしている！

しかし、もはや――

それに感にたえた目をそそぐ人間族はいない。

雨がうちつけるのは、ものいわぬ死体と、くずれはてたかつての平和の名残の夢であった。

クーデター軍は、いつのまにか、豪雨をさけたか、とりあえず姿をけしている。

雨にうたれ、さまよい歩く狂人のすがたもない。全都は、無人の焦土と化しはてたのだ。

そして、その中に――

しだいに、いよいよその姿を巨大にあらわしてくるものは……

雨にうたれ、つやつやとみだらに黒く光りかがやき――

邪悪な生命の脈動に息づきつつ、死を呼吸し、恐怖を餌として、より巨大に屹立した、それ――

黒い塔。

それは、さながら、虚空にむかって何ものかへの、あくことなき呼び声をあげつづけているかのように、雨にぬれぬれと光りながら、破滅と死とほろびのまっただ中に、屹立している。

そして、また。

異世界の住人たちもまた、大揺れにゆれている。

深海にも、高山にも、波動は及んでいた。

「少佐ッ！　報告！」

「何だ！」

「現在地より二十カイリの海底で、海底火山の活動が開始された気配であります！」

「ここまで、影響が出そうなスケールかッ？」

「はい、おそらく！」

「やむを得ん。浮上――移動開始」

「少佐、そ、それでは、安西さんたちが――！」

「やむを得ん。《アーク》を失うわけにはゆかん」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb